

蘆花会通信

第8号

2025年(令和7年)
1月20日

特定非営利活動法人

蘆花会

編集発行人 佐久間保明
<https://www.rokakai.com/>

蘆花と林芙美子の伊香保温泉

作年の蘆花忌の集いでは神田由美子氏(東洋学園大学元教授)により「伊香保温泉の男女」という題で、「不如帰」と林芙美子の「浮雲」が伊香保を中心に紹介されました。

林芙美子は一九三〇(昭和五)年二十七歳で、『放浪記』により一躍有名になった作家です。戦後「浮雲」(一九五一・四)の刊行四箇月後に四十八歳で亡くなりました。「浮雲」ではゆき子が妻である富岡との恋愛に苦しみながら、半ば絶望的な気分のまま二人で伊香保の旅館に出かけ年末年始を過ごします。

富岡は内心死んでもいいくらいの気持ちで、「今日、このまま、伊香保か、日光の方へでも行ってみる気はないかね?」と誘うと、ゆき子は「まるで、新婚夫婦が、旅のプランを相談しているような、浮々した表情」をしたのち、二人は夜更けに旅館に着きます。

そこで、「不如帰で有名な伊香保と云うところが、案外素朴で、如何にもロマンチックだった」(以上新潮文庫)とあるのは、実際に「不如帰」を読んだことのある芙美子の実感を通じて、新婚の武男と浪子が仲睦まじく伊香保に滞在していた同書冒頭の

場面を想起させます。

神田由美子氏の講演では二作に共通の場面を認めながら、いかにも対照的な男女の心情を見事に指摘した手際はあざやかなものでした。また両作品の背景は勝ちいくさであった日清戦争と敗戦直後の日本という違いにより、対比を際立たせています。なお両作はともに映画化され評判を呼びました。



講演後は会場からの発言もあり終始なごやかな雰囲気にも包まれました。近年の温暖化現象で厳しい暑熱が気遣われましたが、豊かな木々の緑陰のためか、意外に過ごしやすい気象に恵まれ幸運な昼さがりとなりました。

愛子忌の集いは

第四土曜日に

今年の愛子忌は例年の第三土曜日ではなく、第四土曜日の二月二十二日となります。なお蘆花忌も九月第四土曜日の二十七日を予定しています。講演開始は午後二時、受付は一時半です。

当日は「幕末維新の傑物関寛翁」という題で、佐久間保明が担当します。話の対象である関寛は「みづのたは」とに現れる異色の医師です。同書では「過去帳から」の一編として、「明治四十一年四月昼過ぎ、妙な爺さんが訪ねて来た」と始まる「関寛翁」に記述があります。関が北海道から粕谷を訪れ蘆花に直言すると蘆花は感銘を受け、北海道に出向き数日滞在しました。後日八十代の翁が自裁したことを知るや蘆花は改めて感慨を深めます。今回は、筆者が昨年七月に北海道の陸別を訪ねた結果報告ともなります。

伊香保温泉と蘆花

昨年の蘆花忌の講演では伊香保温泉が林芙美子の「浮雲」でも舞台になっていたことが報告されました。それほど蘆花と伊香保との結びつきは有名でした。蘆花は生涯に十回も訪れるほど伊香保が気に入っていました。蘆花が最初に伊香保に行った経緯はそれ程知られていません。

蘆花が初めて伊香保を訪れたのは一八九八(明治三一)年五月で、同月五日が結婚五周年の記念日でした。当時蘆花は兄蘇峰との軋轢から脱するべく気分転換を望んでいたところ、姉の音羽子が高崎に嫁しており(夫は牧師大久保真次郎)、近在の伊香保について二人から話がありました。そこには伊香保温泉が子宝を授ける湯としての評判もあつたでしょう。

また蘆花は、『柳橋新誌』の著者で知られていた成島柳北の紀行文により景色の

良さを知り、『自然と人生』の作者としては、みずからそれを確かめたいという気持ちがありました。

さらに蘆花夫妻の住んでいた逗子から上野駅を経由すればその日のうちに高崎に着けるほど鉄道の利便が増していたという最近の事情があります。夫妻は高崎で大久保家に一泊したのち、鉄道馬車で渋川まで行き、そこから人力車で二里の登りを温泉まで運ばれました。

大久保夫妻が勧めた宿も気に入り、蘆花は以後常宿としただけでなく、近隣の眺めの良さも大いに気に入り、『新春』などにも繰り返し文章化しています。

第12回蘆花まつり

昨年の一〇月二十七日(日)には、烏山地域蘆花まつり実行委員会の主催で、一昨年に続いて「蘆花まつり」が蘆花公園で開催されました。天候にも恵まれ、のべ三万人の参加者を得て成功裡に営まれ

ました。蘆花会からも三名が参加してブースを開くことができました。



いくつかの催しのなかでは、小学生を中心とする子どもたちに、起震車が喜ばれていました。車体に据えられた複数の椅子には一度に何人もが着席でき、人工的に起こされた大きな地震特有の揺れを擬似体感しては自然災害の怖さが知られ、良い経験になったことでしょう。

林芙美子の読書

『放浪記』には、小学校時代の友人から『自然と人生』を借りて読んだ芙美子が、「表紙によしの芽のような絵が描いてあつた」として、「——勝てば官軍、負けては賊の名をおわされて、降り積

む雪を落花と蹴散らし。暗くなるまで波止場の肥料置場でここを読む。紫のひふを着た少女の物語り、雨後の夜のあばたの女の物語など、何か、若い私の胸に匂いを運んでくれる。金田さんはみみずのたわごとが面白いと云っていた」(以上新潮文庫)とあります。早くから蘆花の作品に親しんでいたことかしのばれる書き方です。

*公園内では直接現金の授受ができません。お手数ですが会費の納付は銀行振り込みでお願いします。

事務局より

～正会員・賛助会員募集～

【入会金・年会費】

正会員各 1,000 円

賛助会員各 500 円

【振込先】

三菱 UFJ 銀行王子駅前支店

特定非営利活動法人 蘆花会

普通 0274264

*会報の送付を停止希望の場合は左記までお知らせください。

090・1618・9659

sakumaxim@ezweb.ne.jp(佐久間)